

平成30年度「総括評価表」(徳島県立城南高等学校)

評価・評定の基準 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった

自己評価				学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善の方策	
重点目標	重点課題	具体的な対策とその評価指標(⇒印)	活動の実施状況と評価指標の達成度(⇒印)	総合評価(所見)		学校関係者の意見
学力向上の推進	教員の教科指導力を高め、わかりやすく生徒が興味・関心を持てる授業を実践する。 3年生の進路実現のため、生徒の実態に合わせた科目選択が出来る補習授業を実施し、生徒の成績向上に努める。	各学期に授業参観週間を設け同一教科の教員による授業見学、管理職による年間2回の授業観察などを実施し、教科指導力の向上を図る。 ⇒生徒による授業評価の授業満足度80%以上	①教師それぞれが、わかりやすく生徒が興味・関心を持てる授業に努め、授業評価を1学期末・2学期末の年2回実施した。その結果をもとに授業方法の改善に取り組んだ。 ⇒生徒による授業評価での授業満足度は 1年生 88.4%(昨年度90%) 2年生 89.3%(昨年度91%) 3年生 91.8%(昨年度90%) であった。	B	・今年度より導入された電子黒板の利用について研究し、効果的な活用を期待する。 ・今後も生徒が学ぶ喜びを感じながら切磋琢磨し、学力を向上させていけるような授業を展開して行ってほしい。そのためにも相互参観などにより、授業の工夫改善に取り組んでほしい。	今年度、電子黒板が導入され、それらを活用した研究授業や公開授業に取組めた。学ぶことの楽しさやすばらしさに気づいてもらえるような魅力的な授業を目指すために、次年度も教員相互の授業参観週間等の充実を図りたい。 また、現在の学びが自分の将来にどのようにつながっていくのかを理解させ、生徒自らが学ぶ姿勢を育てていきたい。
進路指導の充実	家庭学習の重要性を理解させ、自ら学ぶ姿勢を育成し、学習習慣の確立に努める。	①「自主自立ノート」や面談等を利用して生徒に家庭学習の重要性を認識させる。学習時間調査を定期的に変更し、生徒の学習の状況を教師間で把握する。各教科で週末課題や宿題を課すなどして学習習慣の定着を図る。 ⇒a 学習時間調査を年8回実施する。 b 一週間の家庭学習時間の学年平均目標は、 1年生 16時間/週 2年生 16時間/週 3年生 21時間/週	①毎日の「自主自立ノート(生活記録)」を継続的に記入することで、生徒が自身の時間管理をすることにつながった。また、担任は生徒の学習状況を把握し、その結果をもとに各教科で学習習慣の定着を図る取組を行った。 ⇒連続する7日間(1週間)の家庭学習時間調査を年間8回実施した。 1週間当たりの家庭学習時間の平均は、 1年生 15.0時間/週 2年生 15.7時間/週 3年生 19.9時間/週 であった。	C	・家庭学習の必要性和、勉強と部活動との両立をやり遂げるための有効な時間の使い方ができるような指導を、学校全体でしっかりと取組んでほしい。 ・生徒が進路について考える方策を考えるとともに、その機会を増やし、進路実現につなげてほしい。	進路目標の実現には高い学力が必要であるということを生徒たちにしっかりと理解させ、毎日の宿題や小テストの実施などの取組みを通して、日頃から家庭学習をする習慣を身につけさせたい。 進路講演会やオープンキャンパス等への参加など、将来の自分の進路について考えさせる機会を増やしていきたい。
生徒指導の充実 保護者等との連携強化	遅刻の防止に努め、保護者と連携して生活改善を図る。	遅刻防止については、担任による常時指導(家庭への連絡を含む)とともに、遅刻常習生徒について10回の時点で生徒指導課による生活習慣指導を行い、15回で保護者を召喚し、生徒本人を交えて、担任や学年主任、生徒指導課長で生活改善について話し合う。 ⇒遅刻率1%以内、遅刻ゼロの日年間7日以上	本年度は、学校全体の遅刻ゼロの日は9日で昨年度よりも1日増えた。遅刻の総数については昨年度よりも65件減少した。昨年度と同様に9月以降の遅刻が多かった。遅刻10回で生徒課で面談した生徒は5名で15回で保護者も含めての面談を実施した生徒はいなかった。本年度0.91%で目標は本年度は達成できた。今後自覚を促したい。 ⇒全校遅刻率は0.91%、遅刻ゼロの日は全校で9日であった。 学年ごとでは、 1年生遅刻率0.73%・遅刻ゼロ54日 2年生遅刻率1.22%・遅刻ゼロ38日 3年生遅刻率0.76%・遅刻ゼロ52日 であった。	B	・交通事故の件数を減らすための指導や取組が望まれる。 ・9月以降の遅刻の理由を精査改善し、遅刻ゼロの日が今以上に増えるよう指導を行ってほしい。 ・松柏会の活動も充実しているため、今後も保護者との連携を図ってほしい。	交通事故は27件で昨年度を5件増加した。遅刻に関しては昨年度から65件減少をしたが、2年生が昨年度の1年生時よりも94件増加したことは要注意であり、全体的に指導徹底が必要だと感じる。遅刻率では1・3年生が1%を大きく下回っており、2年生の1.2%と突出している。梅雨時期の遅刻をいかに改善するかが毎年の課題である。
特別活動の充実 人権教育の充実	生徒が充実感・達成感を感じられる学校行事と部活動を展開する。	①学校行事について生徒会と意見交換を行い、より良い行事内容になるように努める。 ⇒生徒による学校行事満足度80%以上 ②部活動は顧問の専門性を配慮して配置し、日々の指導において現場での指導を充実させる。 ⇒生徒による部活動満足度80%以上	①生徒会との意見交換を活発に行い、充実したものとなるように努めた。 ⇒生徒による学校評価アンケートでの学校行事満足度は94%であった。 ②専門性、本人の希望に応じて顧問を配置し、日々の指導も生徒との会話を重視して行っている。 ⇒生徒による学校評価アンケートでの部活動満足度は86%であった。	A	・常に高い評価であるのは、生徒会や生徒との意見交換が適切になされているためであると考えられる。今後も継続して魅力ある学校行事が行われることを臨む。 ・部活動の取組でも、スポーツや文化活動での活躍を、新聞などでよく見る。「文武両道」の精神を今後とも続けてほしい。	今後も生徒会との意見交換を行い、生徒アンケート等で生徒の意見を取り入れていく。 また、顧問同士の対話や部員と教員との対話を多くとることを心がけ、部内雰囲気や透明化に努める。 特別支援教育に関する研修会を実施し、教員の資質を高める取組を継続するとともに、関係諸機関との連携を密にして、生徒の支援体制を充実させる。
特色ある教育活動の推進	特色ある学校づくりの一環としてスーパーサイエンスハイスクールの活動を積極的に行い、成果を生徒の進路に生かすとともに、県下への普及を図る。	①スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の取組により、生徒の理科や数学への興味や関心を深め、理科や数学の基礎的な学力を定着させるとともに、発展的な応用力も身に付けさせる。 ⇒SSHの取組により理科や数学の興味・関心が深まり、その理解が深められたと自己評価する生徒70%以上	①SSHの課題研究や総合科学など、様々な取組を通し、生徒の理科や数学への興味や関心を深め、理科や数学の基礎的・発展的な力が身につくよう努めた。 ⇒応用数理科3年生に実施したアンケート・自己評価で、3年間の活動に対する「満足」86% 科学的な見方・科学的に問題解決する力が身についたとする生徒86% プレゼンテーション能力が向上したとする生徒85% レポート作成能力が高まったとする生徒82% 研究方法や技能の習得ができたとする生徒77%	A	・SSHで研究しているルーブリックやアクティブ・ラーニングを校内で取り入れ、普通科の「総合的な学習の時間」にまで広がりを見せていることを評価する。今後の展開に期待する。 ・SSHの「課題研究」や普通科の「総合的な学習の時間」の成果が、さまざまところで評価されていることは素晴らしい。高大連携等も発展させ、学校全体として取組んでほしい。	文科省のSSH第4期の指定を受けて、課題研究の指導や高大連携についてさらに発展させるとともに、ルーブリックやアクティブラーニング等の情報収集と研究、そして実践を行った。 ルーブリックの研究実践は、生徒の主體的な課題研究の内容向上や教員の指導力強化につながっている。 今後、SSHの取組等の成果を評価するシステム構築やSSHの取組の学校全体への普及に努めていく。
		②科学部の自主的研究活動を促し、各種科学賞での入賞を図る。 ⇒各種科学賞での入選数7以上 ⇒全国大会への出品2以上	②理科担当教員による放課後の指導等により、科学部の自主的研究活動を促し、各種科学賞での入賞を図った。 ⇒日本学生科学賞徳島県審査で最優秀賞1、優秀賞6、入賞2など。 ⇒日本学生科学賞中央審査に1チーム進出。 ⇒全国高等学校総合文化祭自然科学部門ポスター発表。 ⇒中国・四国・九州地区理数科高等学校課題研究発表口頭発表 ⇒スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会ポスター発表			
		③活動成果の県下への普及を図る。 ⇒小学生及び中学生対象実験教室の実施3回以上	⇒小学生対象理科実験教室を1回、中学生対象理科実験教室を2回実施した。 ⇒科学体験フェスティバル in 徳島ブース出展を行った。 ⇒徳島大学と共同で、徳島県SSH高等学校課題研究および科学部研修会を開催し、他の高校にも参加してもらった。			

